

『互いの友』に見るアイデンティティの混乱

武井 暁子

Confusion of Identities in Our Mutual Friend

Akiko Takei

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)はアイデンティティの問題を繰り返し扱っている。下層中流階級から立身出世を果たしたディケンズにとって、「自分は何者か」という問題は不可欠のテーマとなる。だが、アイデンティティのテーマの扱いは年代が進む毎に違いが見られる。例えば、『オリヴァー・ツイスト』(Oliver Twist, 1837-8)は、18世紀のピカレスク小説の伝統にのっとって、孤児であるオリバー(Oliver)は、結末で素性が判明し、紳士階級の仲間入りをする。『荒涼館』(Bleak House, 1852-3)では、女性が感情と性モラルとの葛藤に悩む。レディ・デッドロック(Lady Dedlock)は私生児を生んだ秘密を隠して従男爵と結婚したが、終始罪の意識に苛まれる。彼女は恋人ホードン(Captain Hawdon)の墓の前で死ぬことによって、ようやく本来の自分に戻る。私生児として生まれた主人公エスター・サマーソン(Esther Summerson)は、常に身を低くして生きることを余儀なくされ、望まない結婚を一度は承諾する。エスターの自我は罪の意識に歪められているが、他人に献身的に尽くすことによって、社会に存在を認められ本当の自分を取り戻していく。『リトル・ドリット』(Little Dorrit, 1855-7)、『大いなる遺産』(Great Expectations, 1861)では、社会的上昇に成功した人間がルーツを失うことにより、アイデンティティの不在に悩む姿を描いている。エイミー・ドリット(Amy Dorrit)はマーシャルシー監獄を出た後も監獄の影に脅かされ、自分の本来の居場所は監獄ではないかとさえ思う。彼女は質素な服で結婚式に臨み、自分の根っこは労働者階級にあることを世間に通告する。ピップ(Pip)は財産相続のゆくえんによって運命を翻弄され、金に左右される人間のあさましさをいやというほど見せられ、自分もまた金の魔力にとりつかれていることを悟る。彼は結局財産を相続できなかったが、真の愛情と友情の価値を知って成長する。以上のように年代順にディケンズの作品を見ると、初期の作品ではアイデンティティは単純に身元証明や社会に受け入れられるための条件を意味するのに対し、後期の作品では「一個の人間としての価値は何か」「自分は何を目的として生きているか」「本当の自分は何か」といった人間性や生きて行くための理念を表すものになっている。作家として駆け出しの頃のディケンズは社会で成功するためにがむしゃらにつっぱっていたのだが、功なり名とげた後は自分の心をながめる余裕が出来たのではない。

『互いの友』(Our Mutual Friend, 1864-5, 以下 OMF と略記)は、ジョン・ハーモン(John Harmon)が殺人事件に巻き込まれて身元を偽るところから始まり、彼の正体の判明で大団円となる。その他、生きる目的を見出す者、自己の利益のために出自のうさんくさを巧みにごまかす者、現実から逃れるために新しい自分を創り出す者、マイノリティであるために本来

の価値を認められない者、社会的上昇を果たしたがために本来の自分との矛盾に悩む者という具合に、さまざまな形でアイデンティティの混乱が起こっている。OMF はディケンズが一貫して扱ってきたアイデンティティの問題の集大成といえる。本稿では「アイデンティティ」「自我」「自己」「変身」をキーワードにして、OMF でディケンズが描いた社会の混乱と再編成を読み取りたい。

1

まず、「父と息子」の関係という観点から、父親から独立することによって自分の価値判断を確立し、人生に真正面から立ち向かう強さを身につける男性を見てみよう。ハーモン、ユージン・レイバーン(Eugene Wrayburn)、トエウムロー(Twemlow)がそれにあたる。

ハーモンの死とよみがえりはOMF 全体に深い関わりを持つ。彼は無慈悲な父親に冷遇されて育ち、父親と父親が残した財産への不信に陥っている。とはいえ、父親の遺言通りに結婚と財産相続をするため帰途につくハーモンは未だに父親に支配されている。ところが、ハーモンになりすまし財産を奪おうと企んだジョージ・ラドフット(George Radfoot)が殺害され、しかもラドフットの死体がハーモンと誤認されることによって、ハーモンはジョン・ハーモンとしての自分を失い、「生きている死んだ男」(“living-dead man,” 430)として再生する。そしてジュリアス・ハンドフォード(Julius Handford)、さらにジョン・ロクスミス(John Rokesmith)と名を変える。

ハーモンが素性を隠したのは偶然が積み重なった結果であり、自らの意志ではなかった。しかし、彼は次第に周囲の人間を見極めるために積極的に「生きている死んだ男」になることを選ぶ。ハーモンは正体を隠すことを「埋める」(“buried,” 435)と表現する。彼はラドフットによってテムズ川に「埋められ」、蘇生後はジョン・ロクスミスになりきるためにジョン・ハーモンというアイデンティティを墓場に「埋める」。

ハーモンが身元を隠すのは、一つには長年父親に仕え自分を愛しんでくれたボフィン夫妻(Mr. and Mrs. Boffin)への感謝である。一方、ボフィンも先代ハーモンが自分たち夫婦を相続人に指定した遺言書をごみ山に埋める。ハーモンとボフィンは先代ハーモンがごみ山を掘り当てて作った財産の相続権を「埋める」ことによって、新たな親子関係を築く。その結果、ハーモンが抱く父親と父親が作った財産に対する不信は解消する。

ハーモンが身分を偽るもう一つの理由は、父親が定めた婚約者ベラ・ウィルファ(Bella Wilfer)の愛情をいわば金で買うことへの反発である。彼は愛情を伴わない結婚を奴隷売買にたとえる(429)。過去の自分を一度抹殺することによって、ハーモンは初めて父親に反発し父親と別の生き方を選択する。Richard T. Gaughan は、ハーモンは父親の遺言の施行を中断することによって、新しい人間関係を基にアイデンティティを築けるのだ、とコメントする(Gaughan 232)。

「生きている死んだ男」という立場は生きているとも死んでいるともつかない、実体を伴わないものである(422)。だが、Gaughan が指摘するように、ハーモンが正体を隠すことは仮面をかぶることを意味し、他人を操り、支配する特権を得る(Gaughan 233-4)。ハーモンは表面的にはボフィン夫妻の養女になったベラの使用人に甘んじながら、実は常にベラの優位に立ち、相手に悟られることなく彼女を観察する。ハーモンがベラと結婚してから真相を明かすまではベラに対するテストの連続である。ベラとの結婚、アイデンティティの回復と財産相続によって、ハーモンは社会に復帰し、ジェントルマンの仲間入りをする。彼は横暴な父

親に反発しながらも、結局は父親の決めた女性と結婚して父親よりも微妙な形で妻をコントロールする。

レイバーンもまた父親に支配される息子である。彼は父親をMRF(my respected father, 193)とイニシャル化して呼び、存在を矮小化している(田辺 56)。彼は父親の意向で弁護士になったものの、開店休業状態を続けている。職業選択はアイデンティティを確立するための一助になるのだが(Trilling 111)、レイバーンは職業選択を父親に強制されて、無為の生活を続けるうちに精神の健全さを失いかけている。彼の皮肉で冷笑的な態度は自分の生きる目的がわからない苛立ちの表れである(339)。

レイバーンは自分自身に対して無関心なのと同様、他人に対しても無関心である。名前はアイデンティティの確認の基本だが、レイバーンは他人に好き勝手な名前をつけるのを常とする。例えば、ブラドリー・ヘッドストーン(Bradley Headstone)との口論で、レイバーンはヘッドストーンの名前を聞こうともせず、ずっと“Schoolmaster”と呼ぶ(344-6)。Pam Morrisはレイバーンの話し方の特徴は冷笑や他人への軽蔑であると述べている(Morris 131)。他人のアイデンティティを認知しないのは、彼の投げやりで無責任な生き方がなせる業である。レイバーンはヘッドストーンから襲撃されるのだが、これはレイバーンが怠惰で無責任な生活を清算するために当然受けるべき罰である。

レイバーンが生まれ変わるために貢献するのはリジー・ヘクサム(Lizzie Hexam)である。彼は、父親が選んだ結婚相手を拒絶し、リジーに教育を受けさせ、経済的援助をすることによって、行動力を取り戻す。だが、結婚に際して財産と家柄の釣り合いを重視する社交界の通念からすると、リジーとの恋愛・結婚は不可能であった。だが、ヘッドストーンによって重傷を負わされたレイバーンをリジーが助けることによって、事態は進展する。リジーとの結婚に対して父親の反対が十分予測されていたにもかかわらず、レイバーンは父親の了解を取りつけ、結婚する。そして、リジーを守り社交界の偏見に立ち向かうことを宣言する。レイバーンは、因習を克服して結婚相手を自分で選ぶ事によって、ようやく父親の支配から脱し、「意志と行動力の宝庫」(825)に生まれ変わる。

父親または父親に準ずる人物に束縛される男性といえ、トウエムローもまたしかりである。彼はレイバーン同様、従兄弟のスニッグスワース卿(Lord Snigsworth)の干渉で職業につけず、スニッグスワース卿からの年金だけが収入源である。トウエムローはスニッグスワース卿の馬預かり所の2階に住むのであって、スニッグスワース卿の意のままになる馬同然である。彼はスニッグスワース卿の縁者という資格で、辛うじて社交界の末端に連なることを許されている。つまり、トウエムローはスニッグスワース卿の影法師同然で、彼の独立した人格は全く黙殺されている。彼の洞察力や自信の欠如は、彼が全てにおいてスニッグスワース卿に束縛されて独立した人格を持ってないためである。

結末で、レイバーンの自己の確立はトウエムローの精神的独立をも促す。社交界の面々がこぞってレイバーンの結婚を非難し嘲笑する中で、トウエムローのみがレイバーンを擁護する。ポズナップ(Podsnap)がスニッグスワース卿の名前を出してトウエムローを恫喝すると、微妙な心の問題については、たとえスニッグスワース卿からといえども、指図を受けるつもりはない、とトウエムローは反論する。トウエムローの言葉は、父親の支配から独立したレイバーンに対する祝福であり、またスニッグスワース卿の影法師だった自分への決別宣言でもある。

ハーモン、レイバーンの場合は、アイデンティティの混乱から回復への歩みは父親への反抗と和解と密接に関係する。父親の名前を否定または矮小化することは父権社会に連なることへの拒否である。彼らはテムズ川に投げ込まれ、財産や社会的地位を取り払った裸の自分と向き合った後、やっと父親の呪縛から解放される。ハーモンとレイバーンは結局家父長制社会に戻るのだが、レイバーンとリジーの階級の違いを乗り越えた結婚は因習的な社交界をわずかながら揺り動かしたように見える。そして、トウエムローの中年を過ぎてからの独立宣言でしめくられる大団円は、ようやく本来の自分に戻れた満足が感じられる。

2

ハーモン、レイバーンにとっては、アイデンティティの混乱はモラトリアムのなせるわざで、将来の人間の成長につながるものだった。一方、ヴェニアリングを筆頭とする新興成金階級にとっては、アイデンティティは単純に身元証明と社会で幅を利かすための飾りにしか過ぎない。彼らは欲望を満たす為に自分の出自を偽り、策を巡らす。彼らの虚栄心や自己満足は自分達の狭い社会以外のものへの無関心と偏見を生み出す。次に、ヴェニアリング達のアイデンティティの攪乱ぶりを論じる。

OMF の重要なテーマの一つとして投機が生み出す金とそれにまつわる人間の欲望がある。ディケンズは上流社交界の華やかさを詳細に描くことによって、却って外見とは裏腹の軽佻浮薄さを強調する。特に女性に対しては辛辣である。例えば、レディ・ティピンス(Lady Tippins) は「みずみずしい妖精」(887)、「妙齢の美女」(888)などと描かれているが、実は肌はくすんで皺だらけで、豪華な衣装や入念な化粧はすべて年をごまかす為といった具合である。彼らの行動の動機は金銭欲と虚栄心である。

ヴェニアリング(Veneering)は投機で財産を作ったにわか成金であり、何もかも新しいものだらけの家は、素性のうさんくさを物語る。「自分自身では何も成功せず、作り出さず、生み出さず」(160)と言う通り、投機は錬金術にも似た怪しげなものであって、ディケンズは投機を合法化する資本主義と、金さえあればいかがわしい人間でも国会議員にまで出世できる拝金主義を徹底して攻撃する(159-60)。ヴェニアリング夫妻は金の力で自分達をよりよく見せるために、豪華な晩餐会を頻繁に催し衣装に気を配る。彼らは自らの身元保証のため、トウエムローとスニッグスワース卿の親戚関係を利用し、次々に社交界の名士を招き、誰彼かまわず“friend”という言葉を乱発する事によって、友人の輪が際限もなく膨れあがっていく(田辺 51)。そのような人間関係は実をとまなわれない希薄なものである。ヴェニアリング家のパーティでは、招待客同士の名前の勘違いがしょっちゅう起こり、主人夫婦の存在は全く無視されるのである。

ヴェニアリングが、単なる「知り合い」を「友人」と言い換えることで、勢力を拡大する様はしたたかである。ヴェニアリングが国会議員選挙で行う演説では、トウエムローとの友人関係を強調することによって、あたかも自分自身がスニッグスワース卿の長年の友人であるかに錯覚させ、自分も貴族階級出身であるかのように見せかけている(304)。ヴェニアリングの目くらましにもっとも悩まされるのがトウエムローである。彼はヴェニアリング家の集まりに引っ張り出される毎に「自分はヴェニアリングの新しい友人なのか古い友人なのか」(49)と真剣に悩む。だが、ヴェニアリング家のパーティで全員がレイバーンとリジーの結婚を非難する中、トウエムローだけが2人を擁護する。前述の通り、家柄と金銭の釣り合いを超えたレイバーンとリジーの結びつきが彼の目を覚ましたのである。「紳士とは、人間として

の心ばえを言うのだ」(891)という発言は、れっきとした紳士であるトウェムローの面目躍如であり、彼はやっとヴェニアリングのfriend”という言葉と投機が生み出す金の魔力から逃れる。

3

ヴェニアリング達と違い、ヘッドストーンとチャーリー・ヘクサム(Charlie Hexam)は頭脳を武器を世に出ようとする。彼らもことある毎に自分の優秀さを強調し、下層階級出身であることを隠そうとする。だが、知的プロフェッショナルとしては新興勢力である教師になることでしか、彼らは頭の良さを他人に客観的な形で証明できない。しかも、教師はまだ支配階級から認知された職業ではないので、彼らの社会的上昇は苦勞や犠牲を伴う(小池 146-8)。以下、ヘッドストーンを中心に、社会的上昇が時には自己の喪失と根無し草状態を引き起こすことを考察する。

ヘッドストーンは教師になることによって、貧困から抜け出ようとする第一世代である。彼は、いわばパイオニアであるため、過去と完全に決別出来ず、常に過去の亡霊におびやかされている。Joel Brattin は OMF の草稿を研究し、ディケンズがヘッドストーンの名前を決めることから始まって、ヘッドストーンの人物創造に苦心したことを論じていて、その一つとして、ヘッドストーンの身のこなしや服装の特徴に不自然な堅苦しさを出そうとしていた、という(Brattin 148)。ヘッドストーンのぎこちない態度や思いつめた表情、教師らしい外見への過度のこだわり(266)はすべて内心の不安の表れである。だが、彼は教師らしい服装をしてもまったく板につかないことからわかるように、彼の努力は所詮付け焼刃なのである。彼はリジーをめぐるレイバーンと口論し、終にレイバーン殺害を企てる。彼がレイバーンを憎むのは恋愛と社会的地位の両方で優位に立つ相手への嫉妬と劣等感もあろう。だが、「感情が激しすぎて教師には向かない」(345)とレイバーンに言い当てられて、ヘッドストーンがもっとも触れられたくない部分を見抜かれてしまったことも一因である。レイバーン殺害の夜、ヘッドストーンは船頭の衣装を着用し、それが自然に身についている。この時、ヘッドストーンはもって生まれた動物的な本能に立ち返るのである。彼は過去を捨てるために本来の自分を抹殺しようとしたが、抑制すればするほど生来の激情が歪められ、終に殺人に及ぶ。彼は結局過去の自分を捨てる事は出来ない。ヘッドストーンの出世と破滅を通して、ディケンズはある階級から別の階級に引っこ抜かれた人間がルーツを失って、常に何かに追いたてられるような不安にさいなまれる(小池 182) ことを見事に描いている。

ヘッドストーンの教え子、チャーリーは教師になって立身出世をもくろむ第二世代であり、ヘッドストーンのように疑心暗鬼や劣等感に悩むこともない。チャーリーにしてみれば、才能がある人間にはチャンスが与えられるのは至極当然である。彼はヘッドストーンよりもさらに徹底して自己利益を追求し、邪魔なものは切り捨て、リジーやヘッドストーンにどれだけ恩を受けようとも、出世のさまたげになると思ったら即座に縁を切る。チャーリーは小学校の見習い教員、正規の教員と出世するたびに、その地位に順応する。彼の場合、過去との決別は完璧になされる。ヘッドストーンがリジーに恋することによって、感情を抑制出来なくなったのに対し、チャーリーにとっては恋愛も教師としての地位を固めるための手段でしかない。ディケンズはヘッドストーンが教師としての知識を習得する様子をmechanically” (266)と表現しているが、この言葉はむしろチャーリーにあてはまる。感情に一切流される事なく、ひたすら出世街道を突き進むチャーリーはまさに機械であり、自己中心的で鼻持ちな

らない読者の共感を呼ばない人物になっている。

チャーリーが階級社会の階段を「ひたすら前を向いてまっすぐ進む」(278)姿は、金もうけに血眼になるヴェニアリングと奇妙に似ていて、かつ、イギリスが植民地を拡大していく姿を思い起こさせる。チャーリーもまた、出世の暁には、大英帝国の原動力になる勤勉、冷静、合理的な中産階級の一員になる。

4

とはいえ、階級社会で誰もがヘッドストーンやチャーリーのように気概を持ち、自力で這い上げられるわけではない。マイノリティはやはり社会で搾取され、疎外され、差別される。ウィルファーとベラ親子、人形衣装師ジェニー・レン(Jenny Wren)はヴェニアリングのように泡銭を手にのし上がるあざとさもなければ、チャーリーのように他人を蹴落として出世する冷酷さもない。彼らは想像力によって新しい自己を創り出す。彼らにとって、新しいアイデンティティとは逆境を耐え抜く魔法のマントの役割を果たす。最後に、ウィルファー親子とジェニーの変身、さらに、よきユダヤ人ライア(Riah)への偏見を見ることとする。

“cherub”(天使)と呼ばれるレジナルド・ウィルファー(Reginald Wilfer)は、『辛い世』(Hard Times, 1854)のステープン・ブラックプール(Stephen Blackpool)、『大いなる遺産』のジョー・ガージャリ(Joe Gargery)と同じく、頼りなく気弱な男性である。彼の新しい自分作りは彼の性格同様、消極的で自己逃避的である。ウィルファーは持って生まれたレジナルドという名前が位負けするのではないかという懸念から、R というイニシャルのみを使用し、そのために他人から勝手な名前をいくつも奉られる有り様である。家庭でも、ウィルファー夫人から RW とイニシャルのみを呼ばれることに甘んじている。ウィルファー家では夫婦間の力関係が逆転し、家長として一家を牛耳るのはウィルファー夫人(Mrs. Wilfer)である。Catherine Waters の考察の通り、ウィルファー夫人は外見、性格ともに中流階級の理想の女性とは対極にあり(Waters 178-9)、家庭内には団欒、笑い、明るさがない。ウィルファーは家庭内では家父長社会で要求される男性の役割を果たせない。自己主張を放棄した彼が出来る事は、お気に入りの娘ベラの悩みや愚痴を辛抱強く聞いてやることで、彼はウィルファー夫人の代わりに母親の役目を引き受けている。

器量がいやベラが貧しくすぎずした家を嫌い、玉の輿を夢見るのは当然の事である。だが、ベラは生来聡明で、会ったこともない男性との結婚を条件に先代ハーモンの遺産の分配に預かる事を大変な屈辱と感じている。ベラの怒りは、貧しさゆえに人身売買同様の結婚でさえも甘んじて承諾しなければならないことによって、さらにかきたえられる。ベラはたった一枚の紙切れで結婚を定められる自分をスプーンやオレンジなどの品物にたとえる(80-1)。にもかかわらず、ベラは玉の輿に乗った自分をサルタンに見初められた美女になぞらえる(374)。男性主導の社会では結局のところ、結婚は奴隷売買に等しく、女性は若さと美しさを愛でられる商品であることを彼女は潜在的に理解している。女性の人格を無視した結婚を怒りながらも、その実若さと美しさと引き換えに男性の庇護を受ける事に対して何の抵抗もない。ベラはハーモンを愛するようになってからは、すっかり従順になる(Ingham 64)。

ウィルファーは妻に内緒でベラの結婚に尽力することで、初めて娘の幸せのために積極的に行動する。ベラの結婚後、彼はハーモン夫妻の秘書になって、新たに安らげる場所を見つける。ベラは新婚生活で愛情豊かな妻・母になる。ウィルファーの男性としての権威の剥奪を表す天使というニックネームは、ベラの結婚によってようやく正当な女性の役割として機能

する。ガイドブック片手に家事にいそしみ、子供を抱くペラの姿はまさに模範的な家庭の天使である。“the most endearing creature”(750)と、ハーモンは結婚後のペラを賞賛しているが、『ドンビー父子』(Dombey and Son, 1846-8)のフローレンス・ドンビー(Florence Dombey)、『デイヴィッド・コパーフィールド』(David Copperfield, 1849-50)のアグネス・ウィックフィールド(Agnes Wickfield)、『荒涼館』のエスターのように欠点はないけれども、面白みがなく退屈な女性になってしまった観がある。ハーモンが結婚前のペラについて「高慢で軽薄で気まぐれでお金が好きで慎みがないけれどもかわいい」(257)と言う通り、ペラの魅力は当時の理想の女性像から外れたところにあったのだから。Patricia Ingham は結婚前のペラと結婚後の彼女の落差を指摘し、結婚した後のペラに幼さを見出している(Ingham 65)。ペラは家庭の天使という鑄型にはめ込まれて、それと意識せず夫に支配される。

ジェニーの変身はウィルファー親子よりも積極的である。彼女は年端もいかない不具の少女で、社会から疎外された存在である。さらに、飲んだくれの父親を養わなければならない。彼女の子供らしからぬ辛辣さや観察眼の鋭さは世間の荒波にもまれるうちに培われたものである。過酷な生活を乗り切る為に、ジェニーは自分を母親、父親を子供と呼び、父親との力関係を逆転させて、父親の面倒を見る心理的負担を少しでも減らそうと努める。それから、本名のファニー・クリーパー(Fanny Cleaver)としての自分を抹殺し、童話の主人公の名前を用い、夢の世界を想像するのを唯一の楽しみとする。彼女の空想の世界は花、小鳥、澄んだ空気、静けさいっぱい、厳しい生活を送る人間にとってまさに天国なのである(334)。ジェニーの想像の世界を理解できるか否かが人間性をはかる基準になっていて、リジーとユダヤ人ライアは無条件でジェニーの天国に入るのを許される。

一方、ライアは、マイノリティに対する差別、疎外、偏見の被害を、最も被り、善良さや親切が正当に評価されない。そればかりか、フレッジビー(Fledgeby)はユダヤ人に対する偏見を悪用して、ライアをダミーに仕立てて金貸し業を営み、ライアは冷酷な金貸しだとひどい誤解を受ける。『ヴェニス商人』(The Merchant of Venice, c. 1596-7)の例でもわかるように、ユダヤ人=血も涙もない守銭奴というステレオタイプ化したイメージがキリスト教国では浸透しているため、ライアの美点は他人に理解されない。

ライアは、彼と同じくつまはじきされるジェニー、チャーリーに背かれたリジーに援助の手を差し伸べる。3人はよりそい助け合って、相手をそして自分を癒す。G. W. Kennedy が考察するように、ジェニーのおとぎ話の世界は賛同者を加えることによって、現実の世界で力を持つ(Kennedy 173)。固定化した偏見を押し付けられる少数民族の苦悩をジェニーに語ることによって(795)、ライアはようやくフレッジビーと縁を切る。そして、父親を亡くしたジェニーの親代わりになって、本当の自分を取り戻す。ジェニーもまた、父親らしい父親ができたおかげで、母親の役割から解放される。

* * *

以上のように、登場人物の「本当の自分は何か」「何のために生きるのか」という問題はひととおりの決着がつく。ただし、男性は人間的成長の後、アイデンティティの混乱を招いた元凶と和解もしくは決別しているのに対して、女性は夫もしくは父親に準ずる人物の保護下に入る。異教徒で非白人のライアですら、ジェニーの親代わりになってハーモン夫妻の庇護を受ける身になる。

ディケンズはビクトリア朝の中産階級の上層部に属する白人男性であり、男性主導の社会

が存続することを楽観視していた。にもかかわらず、一見栄華を誇るイギリス社会が、一皮向けば自己本位で虚飾に満ち、弱い者の犠牲の上に成り立っている事を見抜いていた。都市の貧困、拝金主義の横行などの問題は結局何ら解決が見つからない。また、ヘッドストーンの不安や狂気は現代に通じる問題を含んでいる。

人物創造の点からいうと、自らの出自を意図的に攪乱するヴェニアリング夫妻は面白みがあり、自我の分裂や自己の不在に悩むヘッドストーンは共感が持てる人物である。それに対して、アイデンティティの問題を解決した後のハーモン、レイバーン、ベラたちは階級社会の秩序の中に閉じこめられてしまった観がある。ディケンズは、結局「自分が何者であるか」は解決が見つからない「答えのない謎々」(339)であることを言いたかったのではないか。次作の『エドウィン・ドルードの謎』(The Mystery of Edwin Drood, 1870)では、ディケンズは殺人事件という形でアイデンティティの問題を扱い、答えを明かさないうまま世を去る。

*本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会(1998.6.6, 於山形県生涯学習センター遊学館)にて行った口頭発表に加筆補筆を施したものである。

引用文献

- Brattin, Joel. "Dickens' Creation of Bradley Headstone." Dickens Studies Annual 14 (1985): 147-65.
- Dickens, Charles. Our Mutual Friend. 1864-5. Ed. Stephen Gill. Harmondsworth: Penguin, 1971.
- Gaughan, Richard T. "Prospecting for Meaning in Our Mutual Friend." Dickens Studies Annual 19 (1990): 231-46.
- Ingham, Patricia. Dickens, Women and Language. Toronto: U of Toronto P, 1992.
- Kennedy, G. W. "Naming and Language in Our Mutual Friend." Nineteenth-Century Fiction 28(1973-4): 165-78.
- 小池 滋. 『英国流立身出世と教育』. 東京: 岩波書店, 1992.
- Morris, Pam. Dickens's Class Consciousness: A Marginal View. London and Basingstoke: Macmillan, 1991.
- 田辺 洋子. 『Our Mutual Friend の表題再考』. 『英文学研究』第73 巻第1 号 (1996. 9): 47-59.
- Trilling, Lionel. Sincerity and Authenticity. 1972. London: Oxford UP, 1974.
- Waters, Catherine. Dickens and the Politics of the Family. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

『シオン短期大学研究紀要』第39号(1999.12.21 発行): 103-11 頁掲載